

イタリア歌曲の神髄

ディエゴ・トリオを招いて、イタリア歌曲の珠玉の名曲を！

情熱、 愛、死、 そして運命を ドラマチックに

特別
協賛



フェドラ

株式会社

エムワイ工業



株式会社 藤田ビジネスプロモーター

2026年 6月28日 [日] Sunday, June 28th, 2026 14:00 (Open 13:30)

14:00開演(13:30開場) 高崎芸術劇場 音楽ホール

全席指定(税込)

[主催] 株式会社 空間あい [共催] ベルカントジャパン合同会社

[後援] 高崎市、上毛新聞社、群馬テレビ、FM GUNMA

令和8年度 文化庁 劇場・音楽堂等における子供舞台芸術鑑賞体験支援事業



プログラム program

G.ドニゼッティ「愛の妙薬」より「人知れぬ涙」
G. Donizetti "Una furtiva lagrima" (L'Elisir d'amore)

G.プッチーニ「蝶々夫人」より「ある晴れた日に」
G. Puccini "Un bel di vedremo" (Madama Butterfly)

G.ヴェルディ「リゴレット」より「女心の歌」
G. Verdi "La donna e' mobile" (Rigoletto)

G.プッチーニ「トスカ」より「歌に生き恋に生き」
G. Puccini "Vissi d'arte" (Tosca)

G.プッチーニ「ラ・ボエーム」より「冷たい手を」
G. Puccini "Che gelida manina" (La bohème)

G.プッチーニ「ラ・ボエーム」より「私の名はミミ」
G. Puccini "Sì, mi chiamano Mimi" (La Bohème)

G.プッチーニ「ラ・ボエーム」より「ああ、麗しの乙女」
G. Puccini "O soave fanciulla" (La Bohème)

－ 休憩 intermission 20 －

T.コットラウ「サンタ・ルチア」
T. Cottrau "Santa Lucia"

S.カルディーロ「カタリカタリ」
S. Cardillo "Core ingrato"

E.デ・クルティス「勿忘草」
E. De Curtis "Non ti scordar di me"

E.デ・クルティス「帰れソレントへ」
E. De Curtis "Torna a Surriento"

G.プッチーニ「ジャンニ・スキッキ」より「私のお父さん」
G. Puccini "O mio Babbino" (Gianni Schicchi)

G.プッチーニ「トゥーランドット」より「誰も寝てはならぬ」
G. Puccini "Nessun dorma" (Turandot)

G.ヴェルディ「椿姫」より「乾杯の歌」
G. Verdi "Brindisi" (La Traviata)

プログラムノート program note

G.ドニゼッティ「愛の妙薬」より「人知れぬ涙」

ガエターノ・ドニゼッティ作曲のオペラ『愛の妙薬』の第2幕で歌われる、主人公ネモリーノ（テノール）の代表的なアリア「人知れぬ涙」。思いを寄せるアディーナが自分を密かに愛していると気づき、その喜びと溢れる感情を美しく歌い上げる名曲です。

純朴な青年ネモリーノは、気高い村娘のアディーナに片思いをしています。彼女を振り向かせるため、詐欺師の薬売りから買った「愛の妙薬（ただの赤ワイン）」に全財産を注ぎ込みます。その後、アディーナが他の軍曹と結婚しようとしている場面に遭遇し、悲嘆に暮れていると、彼女の頬に「人知れぬ涙」がこぼれているのを目撃します。ネモリーノは、彼女が自分を愛してくれていると確信し、幸せに満ち溢れながらこのアリアを歌い上げます。

G.プッチーニ「蝶々夫人」より「ある晴れた日に」

ジャコモ・プッチーニ作曲のオペラ『蝶々夫人 (Madama Butterfly)』の第2幕で歌われる、世界的に最も有名なソプラノ・アリアの一つです。長崎の丘の上の家で、蝶々さんが夫であるアメリカ海軍士官ピンカートの帰りを一途に信じて待つ場面です。「もう彼は戻らない」と諦め勧める女中のスズキに対し、蝶々さんが「いつか必ず、あの晴れた日に夫の乗った軍艦が港に現れ、私を呼びに来る」と、その情景を目の前にあ

るかのように妄想し、強く言い聞かせるように歌います。切ないメロディ、東洋的な五音階を融合させた、美しく官能的な旋律。劇的なクライマックス：静かな語り口から始まり、最後は「確固たる信仰を持って待っている」という強い決意とともに、爆発的な高音で締めくくられます。悲劇性の強調、観客はピンカートンがすでにアメリカで別の女性と結婚していることを知っているため、彼女の純粋な希望がそのまま深い悲劇として胸に刺さる構成になっています。

G.ヴェルディ「リゴレット」より「女心の歌」

ジュゼッペ・ヴェルディの傑作オペラ『リゴレット』の第3幕で歌われる「女心の歌」は、テノール歌手の定番アリアとして世界中で愛されている名曲です。明るく軽快で耳に残りやすいメロディですが、オペラの物語背景を知ると、実は非常に残酷で皮肉な意味を持っています。

この曲は、女遊びを繰り返す色好みのマントヴァ公爵が、居酒屋で別の女性を口説きながら陽気に歌うカンツォーネです。「女の心は風の中の羽根のように移り気で、嘘つきだ」と、女性の不実さをからかう内容です。公爵を純粋に愛し、騙されているとも知らずに外からその姿を覗き見ている純潔な娘ジルダ（リゴレットの娘）の目の前で歌われます。最も不誠実な当の本人が「女は嘘つきだ」と歌うこの場面は、その後の救いようのない悲劇を際立たせる強烈な演出となっています。

G.プッチーニ「トスカ」より「歌に生き恋に生き」

ジャコモ・プッチーニのオペラ『トスカ』の第2幕で歌われる、ソプラノの最高峰にして最も有名なアリアです。恋人カヴァラドッシを拷問され、彼を救うためにスカルピアから貞操を求められたトスカが、自身の過酷な運命を神に問ひかける絶望と祈りの歌です。美しい旋律の対比：前半の静かで敬虔な祈りから、後半の「なぜ (Perché)」と神に激しく問ひかける劇的な盛り上がりへの変化が胸を打ちます。

歌に生き、恋に生き、私は命あるものに、決して仇（あだ）をなしたことはありませんでした！知らぬまに、どれほど多くの苦しむ人を、私は助けてきたことでしょうか。いつも真実の信仰をもって、私の祈りを聖なる祭壇へ捧げました。いつも真実の信仰をもって、花を祭壇へ捧げました。ああ、私の苦難の時に、なぜ、なぜ、神よ、なぜ私にこのような仕打ちをなさるのですか？ 宝石を聖母の衣に捧げ、歌と星々の光を捧げて、主を讃えてまいりました。ああ、この屈辱の時に、なぜ、なぜ、神よ、なぜこのような仕打ちで私に報いられるのですか？

G.プッチーニ「ラ・ボエーム」より「冷たい手を」

プッチーニのオペラ『ラ・ボエーム』第1幕で歌われる「冷たい手を」は、詩人ロドルフォがミミに愛を告白する、テノールに最も人気のあるアリアの一つです。寒さに震えるミミの手を握り、自分の貧しい生活と彼女への情熱的な想いを、ドラマチックな旋律と最高音のHigh Cを含めて表現します。

G.プッチーニ「ラ・ボエーム」より「私の名はミミ」

ジャコモ・プッチーニの代表的なオペラ『ラ・ボエーム』第1幕で歌われる「私の名はミミ」は、ヒロインのお針子ミミが自己紹介をするソプラノの有名なアリアです。屋根裏部屋で暮らす詩人ロドルフォが名アリア「冷たい手を」を歌い、彼女に素性を尋ねたのに対して微笑みながら答える形で歌われます。

19世紀、クリスマス・イヴのバリの哀愁漂う屋根裏部屋。隣人のミミが部屋の蝋燭の火をもらいに来ますが、鍵を落としてしまい、暗闇の中で2人の手が重なります。ミミの正体：皆から「ミミ」と呼ばれていますが、本名はルチアであることが明かされます。ミミは静かで質素ながら、心豊かな生活と夢を抱いている女性として描かれています。家や外で絹や布に百合や薔薇の刺繍をしています。白い小さな部屋で一人暮らしをしており、屋根越しに空を眺めています。春の訪れや最初の太陽の光を心待ちにしています。「私が刺繍で作る花（造花）」には、残念ながら香りがありません」と歌う寂しげなフレーズは、彼女の儚い運命を予感させます。プッチーニらしい甘美でドラマチックな旋律が特徴です。語るような静かな語り口から始まり、春への憧れを歌う中盤で音楽が大きく華やかに盛り上がり、ソプラノの聴かせどころとなります。このアリアの直後、2人はお互いの愛を確信し、有名な二重唱「愛らしい乙女よ」へと繋がっていきます。

G.プッチーニ「ラ・ボエーム」より “ああ、麗しの乙女”

ジャコモ・プッチーニ作曲の歌劇『ラ・ボエーム』第1幕の結びを飾る「ああ、麗しの乙女は、詩人ロドルフォと純朴なお針子ミミが互いの愛を確信し、共にカルチュ・ラタンの街へと繰り出す場面で歌われる名作の愛の二重唱（デュエット）です。クリスマスイブの夜、パリの寒たい屋根裏部屋で2人は偶然出会います。ロドルフォの有名なアリア「冷たい手を」と、それに答えるミミのアリア「私の名はミミ」を経て、2人の距離は急速に縮まります。仲間たちが部屋の外からロドルフォを呼ぶ声が聞こえる中、月の光に照らされたミミの美しさにロドルフォが心を奪われ、この二重唱が始まります。ロドルフォがミミへの恋心を歌い上げる旋律は、直前に歌われたアリア「冷たい手を」のクライマックスのメロディを引き継いでおり、高揚感を最高潮に高めます。最初は対話のように交互に歌われますが、やがて2人の心が重なり合うように、美しい旋律がひとつに溶け合っていきます。

T. コットラウ “サンタ・ルチア”

「サンタ・ルチア (Santa Lucia)」は、世界的に有名なナポリ民謡（カンツォーネ・ナポリターナ）であり、テオドロ・コットラウが編曲・イタリア語訳をして1849年に出版した名曲です。サンタ・ルチアとは：ナポリ湾に面した美しい港町（ボルゴ・サンタ・ルチア地区）を指しています。元々はキリスト教の「目や光の守護聖人（聖ルチア）」が由来で、船乗りたちの守り神でもあります。

美しい夜のナポリ湾を描写しながら、船頭が「私のボートに乗って夕涼みをしていかないか」と乗客をロマンチックに誘いかける内容です。テオドロ・コットラウ (Teodoro Cottrau, 1827–1879) は、よくこの曲の「作曲者」と誤解されますが、実際には伝統的な民謡を収集して現代風に編曲し、歌詞をイタリア語に訳した人物です。彼のこの仕事によって、ナポリ地方の地方歌だった「サンタ・ルチア」はイタリア全土、そして世界中へと広まることになりました。

S.カルディーロ “カタリカタリ”

サルヴァトーレ・カルディッロが作曲した『カタリカタリ (Catari, Catari)』(原題: Core 'ngrato / つれない心、薄情な心) は、1911年に発表された世界的に有名なナポリ歌曲（カンツォーネ）です。失恋の苦しみを歌う情熱的なメロディ、「カタリ (Catari)」とは、主人公の男性が愛する女性「カテリーナ (Caterina)」の愛称です。自分を振って去っていった薄情なカタリに対し、胸の痛みを切々と、そして激しく訴えかける情熱的でドラマチックな名曲です。作曲家も作詞家もイタリアからアメリカへ移住した人物であり、この曲はニューヨークで書き上げられました。伝説のテノール歌手エンリコ・カルーソーのために作られ、彼の歌唱によって世界的な大ヒットを記録しました。女性への未練と悲哀を圧倒的な声量と情熱で歌い上げるスタイルは、クラシック音楽や声楽のファンを魅了し続けています。

E.デ・クルティス “勿忘草”

イタリアの作曲家エルネスト・デ・クルティスが作曲した「勿忘草 (わすれなぐさ)」は、世界中で愛されている有名なカンツォーネ（イタリアのポピュラーソング）です。1935年に公開された同名のイタリア映画『勿忘草』の主題歌として書き下ろされました。当時を代表するテノール歌手ベニャミーノ・ジーリが劇中で歌ったことで爆発的なヒットを記録し、世界中に広まりました。哀愁を帯びた美しい前奏から始まり、サビにあたるリフレイン部分では、溢れんばかりの情熱と切ないメロディがドラマチックに歌い上げられます。クラシックのテノール歌手や、世界三大テノール（パヴァロッティ、ドミンゴ、カレーラス）のコンサートなどでも定番のレパートリーとして現在も歌い継がれています。寒い国へ去ってしまう恋人（渡り鳥に例えられている）に対して、「私の心はここに残っている、どうか私を忘れないで」と切実にお願ひする、切ないお別れのラブソングです。

E.デ・クルティス “帰れソレントへ”

「帰れ、ソレントへ」(Torna a Surriento) は、イタリアのエルネスト・デ・クルティスが作曲した、世界的に最も有名なナポリ民歌（カンツォーネ）の一つです。

南イタリアの美しい港町ソレントの風景を称え、去っていかうとする恋人に「戻ってきてほしい」と情熱的に訴えかける歌です。一説には、当時の首相ジュゼッペ・ザナルデッリがソレントを訪れた際、町が彼を歓迎し、地元の郵便局誘致などを嘆願（アピール）するために作られたとも言われています。短調と長調の対比：物憂げな短調から始まり、サビで明るく情熱的な長調へと劇的に変化します。世界的な人気：ルチアーノ・パヴァロッティなどの三大テノールをはじめ、エルヴィス・プレスリーが英語詞 (Surrender) でカバーするなど、ジャンルを超えて愛されています。

G.プッチーニ「ジャンニ・スキッキ」より “私のお父さん”

ジャコモ・プッチーニ作曲の歌劇『ジャンニ・スキッキ』に登場するアリア「私のお父さん」は、ソプラノ歌手によって歌われる世界的な名曲です。非常に美しく甘美な旋律を持っていますが、実は劇中では「お父さん、彼と結婚させてくれないなら川に飛び降りて死んじやうから！」と父親を脅すおねだりの歌というユニークな背景があります。『ジャンニ・スキッキ』は、大富豪の遺産を巡る親族たちの騙し合いを描いたドタバタ喜劇（コメディ）です。ラウレッタは青年リヌッチョと愛し合っていますが、家柄の違いや遺産トラブルのせいで、リヌッチョの親族から結婚を猛反対されてしまいます。怒ったラウレッタの父（ジャンニ・スキッキ）も「あんな奴らとは絶交だ！」とへそを曲げてしまいます。困り果てたラウレッタが、父親の頑固な心を溶かすために「大好きなパパ、お願いだから助けて」と懇願するのがこの曲です。メロディは非常に感動的ですが、歌詞は可愛らしくもかなり極端な内容になっています。その圧倒的な美しさから、オペラの枠を超えて映画やドラマのBGMとしても広く愛されています。

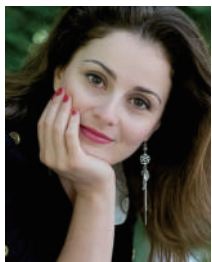
G.プッチーニ「トゥーランドット」より “誰も寝てはならぬ”

『誰も寝てはならぬ (Nessun dorma)』は、イタリアの作曲家ジャコモ・プッチーニが作曲した歌劇『トゥーランドット』の第3幕で歌われる、世界で最も有名なテノールアリアの一つです。舞台は伝説時代の中国・北京。氷のように冷酷な心を持つ姫トゥーランドットは、求婚者たちに3つの謎を出し、解けなければ処刑していました。異国の王子カラフは見事に3つの謎を解き明かしますが、結婚を拒む姫を見て、一つの提案をします。「明日の夜明けまでに私の名前を当てられたら、私は命を捧げよう」。激怒した姫は街の住民に「王子の名前が判明するまで、今夜は誰も寝てはならぬ。もし分からなければ全員死刑とする」という厳格なお触れを出します。静まり返った夜の宮殿で、カラフ王子は遠くから聞こえる「誰も寝てはならぬ…」という役人たちの声を耳にします。彼は自分の名前を知る者は誰もいないと確信し、「夜明けには自分が勝利し、姫の愛を手に入れる」という情熱と勝利への確信をこのアリアで高らかに歌い上げます。静けさから歓喜へのビルドアップ
曲の前半は、静夜の緊迫感を反映したミステリアスで抒情的なメロディで始まります。曲の最後、カラフは「Vincerò! (ヴィンチェーロ＝私は勝つ!）」と3回叫ぶように歌います。最後の「rò」の音で、テノールの見せ場である輝かしい高音が長く引き伸ばされ、オーケストラの大爆発とともに圧倒的なクライマックスを迎えます。

G.ヴェルディ「椿姫」より “乾杯の歌”

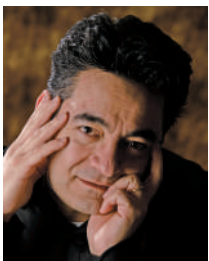
ジュゼッペ・ヴェルディ (G. Verdi) 作曲の歌劇『椿姫』(原題: La traviata) で歌われる「乾杯の歌」(原題: Libiamo ne' lieti calici) は、クラシック音楽やオペラの中でも最も知名度が高く、華やかな名曲の一つです。この曲は、単に楽しい宴会の歌であるだけでなく、物語の悲劇的な運命の始まりを告げる重要なプロローグとなっています。青年アルフレードが、かねてより片思いをしていたヴィオレッタに促されて即興で歌い始めます。彼は歌を通じて彼女への情熱的な愛を伝えます。続いてヴィオレッタがマイク（主唱）を引き継ぎますが、彼女は「愛なんて儂いもの、人生は愉しみ(快楽)こそがすべて」と、利己的な生き方を主張して受け流します。全員が合唱で唱和するへ長調の明るい響きは、この後に待ち受ける彼女の重い病（結核）と、切ない純愛の悲劇の「影」を逆に際立たせる効果を持っています。有名な冒頭の歌詞（イタリア語・日本語訳）
(喜びの杯で乾杯しよう、美しさが花を添えるこの杯で)(移りゆく時を、快楽で酔いしれよう)

オペラ・イタリアーノ *Diego Trio* “ディエゴ・トリオ”



ソプラノ **ソフィー・ゴルデラーゼ**
SOPHIE GORDELADZE

イタリア、ヨーロッパで活躍しているジョージア出身のソプラノ歌手、ソフィー・ゴルデラーゼは、ヘンデル作曲「アルチーナ」の主演から、モーツァルト作曲「イドメネオ」のエレトラ、「フィガロの結婚」の伯爵夫人、「ドン・ジョヴァンニ」のドンナ・アンナ、ロッシーニ作曲「ギヨーム・テル」のマチルデ、そしてヴェルディ作曲「ジョヴァンナ・ダルコ」の主演やルクレチア・コンタリーニ作曲「二人のフォスカリ」（いずれもマルクス・ボッシュ指揮、ハイデンハイム・オペラ・フェスティバルのライブ録音で入手可能）まで、幅広いレパートリーを展開しています。ゾフィーは2024年にマルタ共和国ゴゾ島のアストラ劇場でジョヴァンナ・ダルコを再演しました。



テノール **ディエゴ・カヴァッツィン**
Diego Cavaccin

イタリア、ミラノ近郊のアンジェラに生まれる。R.アントニアッツィ、C.アントニオに師事、ヴォグーラ音楽院を修了。2012年オリヴィエート国際声楽コンクールで優勝し併せて聴衆賞を獲得する。また2014年フランクフルト近郊のブラウンフェルス城で開催されたヴェルディ・オペラ「運命の力」で主演に抜擢されその輝かしい歌声は絶賛される。オペラデビューは2011年「蝶々夫人」ピンカートン役を北欧ツアーで果たす。その後もミラノ、ローマ、ベルガモなどの劇場で好評を得る。



指揮・ピアノ **ディエゴ・クロヴェッティ**
Diego Croveti

イタリア・ミラノ生まれ。現在イタリア・ヨーロッパを中心に活躍する若手指揮者である。ミュンヘンにおいてピアノをカストレン氏に師事。音楽史をミラノ大学で学ぶ。後に指揮者F.フェラリス氏のもとで研鑽を積む。オペラ指揮者として2002年「アイーダ」をハイデルブルク野外劇場（ドイツ）、2006年「トスカ」を釜山歌劇場、2006年「道化師」と「ランメルムールのルチア」をカンザス・グランド歌劇場（アメリカ）、2008年「トスカ」と「アイーダ」をロシア・チェリアピンスクのオペラフェスティバル、2009年「カルメン」を釜山歌劇場にて指揮。ベッリーニ国際声楽コンクール（イタリア・カタニーヤ）本選にて指揮。コレベティとしても1997年～2001年までオーストリア国立グラーツ歌劇場等で活躍。またミラノ・スカラ座、東京・新国立劇場にも招聘される。伴奏者としては、J.クーラ、G.ジャコミーニ、C.リッチャレッリ、B.フリットリー等、世界的な歌手と世界各地で共演する。ヴィオッティ国際声楽コンクール、サントナーイ国際声楽コンクール専属伴奏者などを務める。「カヴァレリア・ルスティカーナ」（オーケストラ・フィルハーモニー・イタリア）がCDデビュー作となり、現在発売中である。

文化庁「劇場・音楽堂等における子供舞台芸術鑑賞体験支援事業」に参加された
18歳以下の方へ



アンケートのご協力を
お願いします。



本日は演奏会にご来場いただき、
誠にありがとうございました。

18歳以下の方、またお着物で、ご来場いただいた方は、終演後に少しお待ちいただけましたら、**舞台上で本日の出演者と一緒に記念撮影をしていただけます。**

撮影したお写真は、後日メール、またはプリントを郵送にてお届けいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

この度、本日の公演を実現するにあたり、
匿名を含めてご協賛いただき、
ありがとうございました。

株式会社 フェドラ

株式会社 エムワイ工業

株式会社 藤田ビジネスプロモーター

佐藤とし子 様

株式会社 しみづ農園

チャレンジャー音響株式会社

中澤行政事務所

比紹企画

松浦幸雄 様

株式会社 丸越

ミューズ音楽工房

株式会社 雪草楽器



あなたに愛と調和と芸術を
株式会社 **空間あい**

株式会社 空間あい 代表取締役 新井 淨

〒370-0087 高崎市楽間町 280 番地 14 Phone 090-1815-4608 Fax 027-344-1582

【E-mail】 info@kuukanai.com 【HP】 https://kuukanai.com 【ONLINE SHOP】 https://shop.kuukanai.com